

ファッションインジャパン 1945-2020—流行と社会

2021年3月20日（土・祝）～5月16日（日）

もんぺから Kawaii、さらにその先へ 戦後日本のファッションをたどる

1970年代以降、日本の装いの文化は、その独自の展開から世界からも注目されてきました。そのユニークさと魅力はどこからきたのでしょうか。

明治期以降、近代化を進めた日本の社会は大きく変化しました。衣生活も例外ではありません。洋装をとり入れ、洋服と和服を公私によって使い分けていた時代を経て、第二次世界大戦後には洋服が日常着として定着します。こうした衣生活の変化を受け継ぎ、戦後には独自の装いの文化が開花しました。

本展では、戦後から現在に至るまでの日本のファッションを、衣服やアイデアを創造するデザイナー（発信者）と、衣服を身につけ、時に時代のムーブメントを生み出すこともあった消費者（受容者）サイドの双方向からとらえ、その両者をつないだメディアも参照し、概観します。衣服だけでなく、写真、雑誌、映像といった豊富な資料を通して、各時代のファッションと社会のあり様を紐解いていきます。戦後日本のファッションについて再考する試みは、わたしたちが生きる現在、そして未来のファッションと社会のありようについての対話を生み出すまたとない機会となるでしょう。

〔主催〕 島根県立石見美術館、国立新美術館、読売新聞社、しまね文化振興財団、日本海テレビ、山陰中央新報社、中国新聞社、文化庁、独立行政法人日本芸術文化振興会

〔協力〕 七彩〔後援〕 芸術文化とふれあう協議会、NHK 松江放送局

〔開館時間〕 9:30～18:00（展示室への入場は17:30まで）〔休館日〕 火曜日（5月4日は開館）

〔観覧料〕 前売券／一般1,000円 大学生500円 小中高生200円

当日券／一般1,200円（950円） 大学生600円（450円） 小中高生300円（250円）

※上記観覧料で、島根会場特別展示「コズミックワンダーと工芸ぱんくす舎『ノノ かみと布の原郷』」もご覧いただけます。

※（ ）内は20名以上の団体料金

【問合せ先】 〒698-0022 島根県益田市有明町5-15 島根県芸術文化センター「グラントワ」内 島根県立石見美術館
TEL 0856-31-1860 FAX 0856-31-1884 <http://www.grandtoit.jp>

プロローグ：1920-1945年 和装から洋装へ

明治期に入ると近代化政策の一環として洋装が取り入れられます。人々は洋服を受け入れていったものの、和服を着ることを手放したわけでもありませんでした。1920年代から大量消費社会を迎えた都市には「モダンガール」が現れ、その姿が様々なメディアを彩ります。

第二次世界大戦中の総動員体制下では、日常から公式の場まで対応できる国民服が制定され、戦局が厳しさを増すと多くの男性が国民服を着用。女性のためには婦人標準服が定められましたが、実際に普及したのはもんぺでした。



1



2

1_ 師岡宏次《銀座の女性》1935年 東京都写真美術館蔵

2_ 《唐草模様銘仙もんぺ》1940年代 橋本晴男コレクション 撮影：山崎信一

1章：1945-1950年代 戦後、洋裁ブームの到来

戦争が終わると、人々は着物など限られた物資を材料として更生服やもんぺを作って身につけました。戦中からニーズが高まっていた洋裁学校には、戦後入学希望者が殺到し、若い女性の間で洋服の仕立てを習うことが大流行します。そこに学んだ女性たちは、製法が掲載された洋裁雑誌、スタイルブックなどを参照し、自身で洋服を作りました。全国に広がったこの洋裁ブームが日本に洋服の普及を決定づけました。他方、1950年代後半には、映画が黄金期を迎え、「真知子巻き」や「太陽族」ファッションなど、映画をきっかけに流行が生まれました。



3



4

3_ 森英恵《アロハシャツ (映画『狂った果実』衣装)》

1956年 日活株式会社蔵 撮影：杉本和樹

4_ 長沢節《女性像 (赤いコート)》 1950年代
セツ・モードセミナー蔵

2章：1960年代 「作る」から「買う」時代へ

景気が上向きに推移すると中産階級が広がりを見せ、日本でも消費拡大がおこります。1964年の東京オリンピックを契機に、家庭にはカラーテレビの普及が進み、映画に代わってテレビが大きな影響力を持つようになりました。上質な既製服の生産が可能になると、洋服は徐々に仕立てるものから購入するものへと変化します。ロンドンから始まった若者文化は日本にも飛び火し、ミニスカートや濃いアイメイクなどが流行。若い男性の間にはアメリカの大学生を模した「アイビー」スタイルが広がりました。



5



6

5_ 望月靖之《ジャケット、スラックス (1964年オリンピック東京大会 日本選手団男子開会式・閉会式用ユニホーム)》 1964年
ジャパンスポーツウェアクラブ製作、オリンピック東京大会組織委員会頒布 湯里まちづくりセンター蔵

6_ 伊坂芳太良《エドワーズ 1970年度ポスター・カレンダー原画》
1969年 ペーターズショップ&ギャラリー蔵

3章：1970年代 個性豊かな日本人デザイナーの躍進

海外のコレクションに参加する若手日本人デザイナーたちが登場し、世界で華々しい活躍を見せます。東京では、気鋭のデザイナーたちが「TD6 (トップデザイナー6)」を立ち上げ、「フォークロア」や「ユニ・セックス」という概念など、個人の生き方を反映する多様な装いを発信しました。巷では60年代後半以降、学生運動が激しく展開され、民主主義の象徴として、Tシャツやジーンズが大流行します。原宿は若者の街へと変貌し、雑誌『アンアン』等の創刊もファッションへの関心を強く後押ししました。



7



8

7_ 楯田正義、山本寛斎《David Bowie》 1973年
©Sukita

8_ad 川原司郎、d 松田敬一、c 吉田晃・田中収三、
p 飯塚武教、adv 日本国有鉄道
《ディスカバー・ジャパン no.4 「金沢・旧市内」》
1971年 アドミュージアム東京蔵

4章：1980年代 DCブランドの最盛期

日本の経済成長が頂点を極めた80年代は、「感性の時代」という言葉がマスコミで頻繁に用いられます。それを象徴するように、デザイナーの個性を打ち出した日本の衣類メーカーブランド、いわゆる「DCブランド」が提案する服が街に溢れました。一方、スポーツ・ウェアやボディコンシャスなシルエットの服も流行し、また低価格で高品質な商品の提供を追求するブランドが登場するなど、ファッションはさらに多様化します。85年には国内32ブランドが参加した「東京コレクション」が開催され、日本発のファッションは一層熱気を帯びました。



9



10

9_ 広川泰士《Kohshin Sato × マイルス・デイヴィス》
1988年 作家蔵 撮影：広川泰士

10_ ジュンコシマダ《88-89AW》 1988年
撮影：Guy Bourdin

5章：1990年代 渋谷・原宿から発信された新たなファッション

バブル崩壊後は「街」から多くの流行が生まれました。原宿のキャットストリートに並ぶ人気店の提案するスタイルをうつした「裏原系」や、渋谷を中心とした「女子高生ブーム」、特定の音楽動向がグルーピングされた「渋谷系」など、若者たちが主体となってファッションを発信します。インターネット普及前夜であった90年代後半には、ストリートスナップ専門誌やコギャル向けなど、対象を細分化した雑誌が次々と創刊されました。そこではおしゃれな着こなしの読者モデルたちが影響力を持ち、流行を生み出すファッションリーダーとなっていきます。



11



12

11_ アベイシングエイブ《1ST CAMO SNOWBOARD JACKET》
1990年代後半 A BATHING APE®

12_ ストリート編集室発行《『FRUITS』8月号 No.13 表紙》
1998年 個人蔵

6章：2000年代世界に飛躍した「Kawaii」

ストリートの動向が同時代のデザイナーたちにとって着想源となり、日本発のファッションが「Kawaii」カルチャーとして世界でも認識されるようになりました。原宿を中心に、ヴィジュアル系バンドが牽引した「ゴシック系」や「ロリータ」など、西洋にルーツがあるスタイルを独自に解釈したスタイルや、モテを意識したコンサバティブな服装が流行。また、長引く不況の影響も相まってファストファッションが普及し、安価にかつ誰もが人気のスタイルで身をつつむことが可能となりました。



13



14

13_ ベイビー・ザ・スターズ・シャイン・ブライト
《はわせドールワンピース》 2002年

BABY, THE STARS SHINE BRIGHT 蔵

14_ 廣岡直人《ボーダーダメージモヘアニット,
チェックボンテージパンツ》 2002年

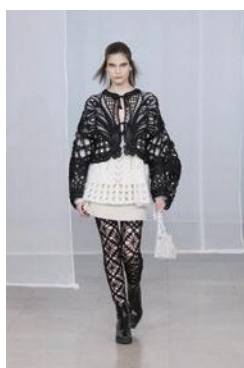
h.NAOTO 蔵

7章：2010年代「いいね」の時代へ

2011年3月11日に東北大震災が起き、福島第一原発事故が発生。景気もさらに落ち込み、環境負荷と経済負担の少ない「サステナブル（持続可能）」な社会が目指されるようになってゆきます。ていねいな日常を重ねる「暮らし系」と呼ばれるライフスタイルや、限りなくシンプルなスタイルである「ノームコア」が登場。ファストファッションは存在感を増し、リラックスしたムードのカジュアルなスタイルが時代の主流となりました。インターネットを介した個々人のやりとりが定着すると、情報発信地としての街の存在感は弱まり、時代を象徴する大規模な流行ではなく、少数の人々の共感を呼ぶ小さな動向が並存するという新たな状況が生まれました。



15



16

15_ 山下陽光《ワンピース》 2020年
途中でやめる 個人蔵

16_ 黒河内舞衣子《ジャケット、ニット、スカート、
ソックス、バッグ、シューズ》 2020年秋冬
Mame Kurogouchi 蔵

8章：未来のファッション

現在、SNSが幅広い世代に浸透したことで、都心部と地方、そして日本と世界各国の距離が縮まり、だれもが発信／受信を当たり前に行うようになりました。ウェブ上で衣類を簡単に購入できるようになると、消費サイクルも加速。今やサステナブルを考慮しない物作りは難しいとさえ言える状況になっています。そうしたなか、2020年はCovid-19(新型コロナウイルス)が全世界的な流行をみせる未曾有の事態となりました。外出制限が課せられるなか、環境汚染、人種や性による差別など、これまで社会が抱えていた問題が次々に顕在化し、そのような状況下でファッションは改めてその役割や可能性を問われることとなりました。独自性が評価されてきた日本のファッションは、未来になにを示すことができるでしょうか。



17



18

17_山縣良和《ドレス》

writtenafterwards 11th collection「After All」より 2020年春夏

writtenafterwards 蔵 Photo by Yuji Hamada

18_コズミックワンダーと工藝ぱんくす舎《かみのひかりのあわ水会》

2015年 撮影：長島有里枝

【同時開催・島根会場特別展示】**コズミックワンダーと工藝ぱんくす舎「ノノ かみと布の原郷」**

藤、楮、大麻、楮、オヒョウ、芭蕉など、かつて衣類として着られた「自然布」と、それらを原材料とした手漉き和紙から、日本各地の風土をみつめ、その豊かさを照らします。日本各地に残された希少な手仕事と、それに呼応し生み出された新作を併せて展示し、古の暮らしの面影とその背景にある人々の精神性、近年の私たちの暮らし、そしてここから先の人と自然の関係を考えます。

会場：展示室C

【関連プログラム】**スペシャルトーク「装苑と日本のファッションと雑誌と。」**

洋裁の専門誌として創刊され、時代のファッションの動向を伝える媒体として現在も刊行されている『装苑』。同誌の編集者として活躍した西谷真理子氏を招き、1960年代から1990年代に刊行された『装苑』を軸に、「編集」という視点からファッション誌のあり方について考えます。

日時：5月1日（土）14:00～15:30

講師：西谷真理子（京都精華大学客員教授） 聞き手：当館学芸員

会場：講義室（当日先着25名／聴講無料）

グラントワ eco マーケット 2021（仮）

リサイクルやサステナブルをテーマに、服や雑貨、地元野菜などがならぶマーケットを開催します。

日時：5月1日（土）10:00～14:00

会場：中庭広場

ギャラリートーク

日時：会期中4回開催予定 いずれも14時から

会場：展示室D・A

当日先着10名／参加無料（ただし観覧券またはミュージアムパスポートが必要です）

ドレスコードでプレゼント！

会期中の土日祝日に赤色または白色のものを身につけてきた方、先着20名様に真っ赤なエコバックをプレゼントします。

◎関連プログラムの詳細は、決まり次第展覧会特設サイトでお知らせします。